

LITTERAE POPULI

北海道大学の今を伝える広報誌、リテラポプリ

<http://www.hokudai.ac.jp/pr/>

発行：北海道大学 総務企画部広報課
〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目
Tel: 011-706-2902 Fax: 011-706-2092
E-mail: kouhou@jimuhokudai.ac.jp





Litterae Populi

『リテラポプリ』は、北海道大学の“今”を伝える広報誌として、年2回発行します。題名の“Litterae Populi”はラテン語で「ポプラの手紙」を意味します。

目次

03 **特集** つながり。
 04 Hokkaido サマー・インスティテュート
 10 『食と健康の達人』 拠点
 12 埋蔵文化財調査センター

14 対談「フロンティアスピリットを訊く」
 大津市長
 越 直美

20 研究室訪問「研ぐ」
 大学院メディア・コミュニケーション研究院
 公共伝達論分野 准教授
 鍋島 孝子

22 卒業生インタビュー「同窓異曲」
 有限会社ムラタ 伊那ワイン工房取締役社長
 村田 純

24 アンバサダー・パートナー通信

26 歴史紹介「挑戦の140年」

28 トピックス

30 キャンパス風景

リテラポプリ 58号 2016年11月発行

編集／リテラポプリ企画編集チーム

三上 隆 (理事・副学長)

井上 高聡 (大学図書館)

菅原 広剛 (情報科学研究科)

富成 絢子 (メディア・コミュニケーション研究院)

西口 規彦 (工学研究院)

山本 学 (情報科学研究科)

湯浅 万紀子 (総合博物館)

隅田 由美子 (広報課)

カバーフォト／山本 顕史 (ハレバレシャシ)

写真／寺島 博美 (コトハ写)

制作協力／佐藤 守功 (佐藤守功デザイン事務所)

印刷／株式会社アイワード

表紙撮影場所／中央ローン

特集

つながり。

1876年に札幌農学校として開学以来、今年で140周年を迎えた北海道大学。その教育・研究の現場は多種多様な「つながり」によって育まれ、発展し続けてきた。特集では、「国際的なつながり」、「地域のつながり」、「時空とのつながり」という3つの観点から、本学の取り組みについてお伝えする。

北海道に留学する、という選択。



この夏、北海道大学は新たな事業
「Hokkaido サマー・インスティテュート」を開始した。
様々な国の学生と一緒に、
世界で活躍する研究者の授業を受ける。
爽やかな夏の北海道をフィールドにした
新たな事業が展開された。

Hokkaido
サマー・インスティテュート

特集
つながり
connection
1
— 国際 —

Hokkaido サマー・インスティテュートは、世界の第一線で活躍する研究者を招へいし、国内外の学生を受け入れることで、世界の多様な知が集う多文化キャンパスの実現を推進する。



HSIの授業には、実習やフィールドワークが含まれているものもある。広大な北海道の地の利を活かして、札幌はもとより、室蘭、知床などでも授業を行っている。

HSIでキャンパス全体が国際化することは「世界の課題解決に貢献する北海道大学へ」向けての礎となる。

夏、キャンパスが国際化する。



「スーパーグローバル大学創成支援」事業のトップ型に採択されている本学は、「Hokkaidoユニバーサルキャンパス・イニシアチブ」構想に基づいて、多様な教育改革を進めている。この構想の中核をなすプログラムHokkaido サマー・インスティテュート(HSI)がこの夏始動した。

HSIは、海外の多くの大学が夏休みとなる6〜9月にかけて、世界の第一線で活躍する研究者が本学に集い、地球規模の環境問題からサービスデザインまで、様々な授業を行う教育プログラムだ。授業は英語で行われ、北大生のみならず、世界中の学生が先鋭の教育を受けられるよう、門戸は世界に開かれている。

「Hokkaidoユニバーサルキャンパス・イニシアチブ」構想の中で既に行われているラーニング・サテライト(LS)は、本学の教員が海外の大学で授業を行って単位を与える、いわば北大が世界に出ていくプログラムだが、HSIは北大のキャンパ

スを国際化するもので、LSと好対照の関係をなしている。HSIは日本にいながらにして世界の研究者から授業を受けられる、他に類を見ない画期的な事業だ。

「授業だけに留まらないう「インスティテュート」。

HSIの狙いは、単に英語の授業を提供することだけではない。「北大教員が外国人研究者と協働で授業を企画・運営することにより、学問・研究上の交流を深めるだけでなく、組み立てから評価まで、国際的に通用する授業が展開できるようにすることを期待しています」と、国際交流担当の上田一郎理事・副学長はその意図を語る。国際的に通用する授業となるためには、科目の成績のつけ方が重要になる。教員同士が授業の構成、役割、試験方法を共同で検討し、最終的に成績基準を話し合う。その過程をお互いに構築してほしい、との思いがある。

「せっかく招いた海外研究者な

ので、セミナーや共同研究など、授業以外の活動にも交流を広げ、様々な面に国際感覚が波及してほしいですね」と上田理事・副学長。もくろみ通りの、ホスト役の教員の研究室では、招へいた研究者を交えての討論や研究合宿なども行われており、共同研究や共著論文執筆の打ち合わせをするまたとない機会となった。

オール北大の授業展開

サマースクールと冠する取り組みは他大学でも見られるが、HSIの特長の一つは、全学で授業を開講し、単位を与えている点である。2016年度は24の大学院・学部で総数71の授業が開講された。受講者は約920人にのぼる。HSIの授業科目は、北大生にとって学生の所属に関わらず履修ができる科目として位置づけられている。所属する研究科等の修了・卒業要件にも組み入れやすく、専門分野のみならず研究科等の枠を超えた学びの中で新たな視点を得ることができる。総合大

学の強みである。

HSIは、学生が受講したい科目を短期間で履修できるよう、集中講義形式で開講されている。複数の授業科目を組み合わせて受講することができ、特に海外の学生はまとまった日程でいろいろな授業を受講できるため、予定を組みやすい。HSIの受講申請・登録はウェブサイトで入力でき、手続きの利便性が海外からの受講生を増やした要素にもなっている。学位取得を目的とする「留学」は大学間で優秀な学生の取り合いになることもあるが、単位取得が目的であれば送り出す側の大学も後押しし易い。学生にとっては国際経験の機会、関係大学にとっては大学間交流と、互恵関係となる。「将来、北大のキャンパスのあちこちで多くの国際交流が行われるようになればよい」と上田理事・副学長。スーパーグローバル大学創成支援事業の最終年度である平成35年度には300科目の実施を目標として掲げている。世界最大規模のプログラムが始まっている。

Hokkaido サマー・インスティテュート 受講者に聞く



応用分野を知るきっかけに

清華大学(中国) 修士1年
王 琦(専攻:化学工学・生物学)

中国では大学生は海外留学を目指すのがトレンドで、HSIはホームページを見て受講しました。母校では専門に関連する分野を広く知ることが推奨されます。化学工学・生物学を専攻していますが、HSIの授業は最先端の応用分野を知るきっかけになると期待して受講しました。修士課程を終えたら日本の博士課程への進学を考えています。今回HSIでは数週間で複数の科目を受講しましたが、滞在期間中にあちこち訪ねたり、受講者や日本人々と積極的にコミュニケーションをとって、日本を知る機会になりました。



ここでしか得られないものがある

延世大学校(韓国) 修士3年
李 明憲(専攻:バイオサイエンス)

講義世話人から指導教員に案内があり、その勧めで研究室の仲間と一緒に受講しました。母校では座学が中心ですが、HSIでは授業の他に研究合宿などの機会もあり、グループディスカッションなども行いました。そのような双方向的な活動は、将来仕事をする上でのトレーニングにもなると思います。生物学が専門の自分にとって、手薄だった有機化学の話が聞けたのも役に立ちそうです。人の交流も、期待していた通り国際的な友人ができました。先輩達にもここでしか得られないものがあると積極的に受講を勧めたいです。



第一人者の授業を受けられる機会

北海道大学大学院生命科学院修士1年
斎藤瑞紀(専攻:医薬)

先輩からの勧めで受講しました。去年から合宿にも参加していますが、HSIでは自分の専門分野の他にバイオ医薬品、免疫、有機化学、タンパク質化学、ウイルス学などの基礎的知識を身につけられると期待しています。有名大学の第一人者の授業を受けられる機会は滅多にないですし、他分野の知識により新しい視点加わってきて刺激的です。自分の研究テーマである副作用が少ない麻疹の薬を作るヒントを得たいです。英語での授業や他科目との時間割の重なりなど大変なこともありましたが、貴重な話を聞くよい機会でした。

Hokkaido サマー・インスティテュート 2016年度 実施科目数

大学院科目: 61
学部科目: 10

海外から招へいた研究者数 (講師)

91人

- 招へい研究者
- ・アムステルダム大学(オランダ)
- ・オックスフォード大学(UK)
- ・オーストラリア国立大学(オーストラリア)
- ・KAIST(韓国)
- ・カロリンスカ研究所(スウェーデン)
- ・シンガポール国立大学(シンガポール)
- ・香港中文大学(香港)
- ・ミュンヘン工科大学(ドイツ)
- ・モントリオール大学(カナダ)
- ・UCLA(USA) など

北大生
約720人

国内他大学、海外からの 受講者数

200人

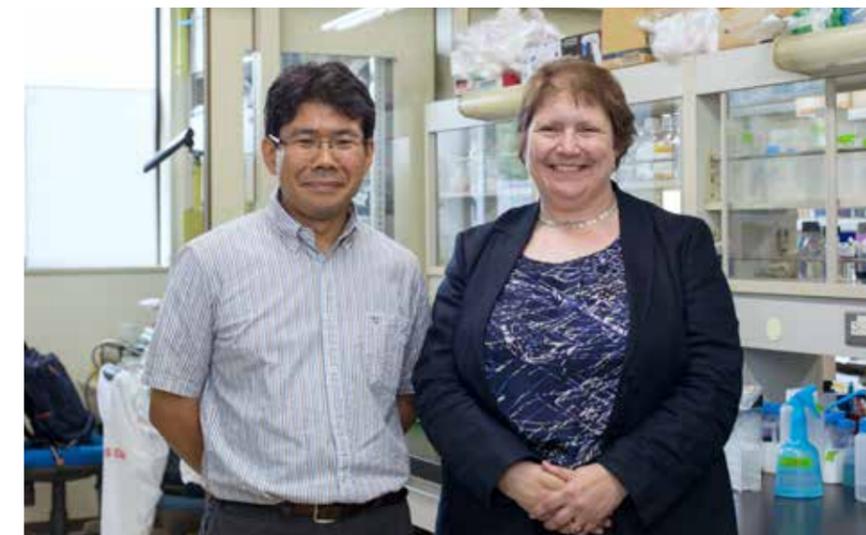
- 受講者
- ・エジンバラ大学(UK)
- ・延世大学校(韓国)
- ・シドニー工科大学(オーストラリア)
- ・シンガポール国立大学(シンガポール)
- ・清華大学(中国)
- ・チュロンコン大学(タイ)
- ・デラサル大学(フィリピン)
- ・香港中文大学(香港)
- ・バルセロナ大学(スペイン)
- ・ヘルシンキ大学(フィンランド) など

国際感覚をはぐくむ授業。

生命科学院では海外研究者を招いての授業の取り組みが3年ほど前から始められていて、様々な経験を蓄積してきた。最先端のバイオ医薬品に関するトレーニングプログラムの構築にも取り組んでいる。海外研究者による授業の構想はグローバル教育、研究開発、産学連携の3つを柱としており、HSIの目的にも合致したことから、HSIプログラムの導入は円滑だった。HSIでは、授業以外の時間を活用して実験計画や論文執筆の打ち合わせ、研究セミナーや討議など、活発な研究交流も行われた。

平成27年度のHSI試行段階から、共同で授業を開講しているのが薬学研究院の前仲勝実教授と、講師としてオックスフォード大学から招へいされたサラ・ローランドジョーンズ教授だ。今年度は生命科学院の「バイオ医薬学基礎特論」を開講した。

ローランドジョーンズ教授の専門はウイルスに関する基礎研究である。HSIの授業では医学の視点から感染や免疫の仕組みについて語り、バイオ医薬学の全体像をつかむための重要なポイントを担当。「バイオ医薬学基礎特論」の受講生の多くは生命科学院の学生だが、他の学院で学ぶ留学生や海外の大学からの学生も参加している。生命科学院の学生は、自分の研究分野の受講が盛んだという。一方、海外の学生の中には自分の専門から範囲を広げた分野も学び、自身の専門がどう世の役に立つか知る機会にしたいと、視点を世界に向けている人もいる。「異なる専門分野の人たちの交流では新たな視点が得られます。とても生産的な機会です」と、ローランドジョーンズ教授は満足げに語る。学生にとっ



薬学研究院の前仲教授(左)とオックスフォード大学のローランドジョーンズ教授。2人は、前仲教授が博士研究員としてオックスフォード大学に在籍していたときに知り合い、20年来の交流を続けている。



笑顔をうみだす 達人レシピ。



吉野プロジェクトリーダー（中央）と打合せをするメンバー。リラックスした雰囲気、多彩なアイデアが出される。

てをしたい」と、誰もがもつその願いに真剣に向きあっているのである。

岩見沢市でつくる 多彩なアプローチ。

『食と健康の達人』拠点が焦点を当てたのが北海道岩見沢市である。札幌からそう遠くはない、人口約8万5千人のこの市は、少子高齢化が進んでおり、10年後の日

本の姿を示しているとも言われている。この岩見沢市を舞台にさまざまな社会実装が開始された。

その一つが、赤ちゃんの健康管理を行うアプリ「家族健康手帳」の開発だ。赤ちゃんのご飯や排便を写真で記録していくほか、おむつの替え方など実際のな情報を見ることが出来る。母子手帳をもらう時に一緒にこのアプリの説明も受けるのだが、ポイントが、アプリを使って顔なじみの保健師や助産師、管理栄養士などに気軽に悩みを相談できるところだ。「家族健康手帳」アプリによって、子育ての不安を抱えている母親と専門家を結び仕組みがつけられた。

『食と健康の達人』拠点では、10年後を見据えた潜在的なニーズから「プレママ（出産前の女性）の健康」という課題にも取り組んでいる。近年、未熟児として生まれてくる赤ちゃんが多い一因として、母親の栄養失調が考えられている。18歳ぐらいまでは日本人女性のBMI（体格指数）は世界とさほど変わらないが、20代から急激に下がる人達がいる。それは単純にいうと「お菓子で栄養を摂っている」からだという。そこで進めているのが、街の未来を

担う高校生へのアプローチである。『食と健康の達人』拠点は、岩見沢市の緑陵高校が実施する課題研究に協力し、高校生自身が掲げた「子育て」や「街づくり」というテーマに対して、座談会を行っている。高校生の視点で多種多様なアイデアが出される中で、子育てに限らず岩見沢市の農産物、特産物で街を活性化しよう、食に焦点を当てた話題も数多くでてきた。

気づきから創出する 健康サイクル。

健康のために、と言われても押しつけでは長続きしない。『食と健康の達人』拠点が目指しているのは、自分の健康状態に気づく↓楽しみながら自分で行動を変えらる↓自分にあった食・運動を選択する↓健康コミュニティを構築する、というサイクルをそれぞれの人が創出することだ。

2016年7月にリニューアルオープンした北海道大学総合博物

館には、小中学生が食や健康に関する質問にゲーム形式で答えやすく展示ブースを設置した。これら子ども達が食や健康に興味をもつきっかけづくりだ。「時間をかけて新しいアプローチ、新しいコミュニティを新しくデザインし直そう、というのが僕らの大きなチャレンジです」と、『食と健康の達人』拠点プロジェクトリーダーの吉野正則客員教授はこやかに語る。「食育」といわれると構えてしまうが、体験を共有することで自らの食や健康への興味がうまれてくる。

私たち一人ひとりが楽しみながら健康な生活を創造することを目指して、『食と健康の達人』拠点の活動は、地域社会へ、そして未来へとつながっている。



「家族健康手帳」アプリは、育児に関するきめ細かな情報も入手できる。将来的には、それぞれの子どもに対する検診案内なども配信する予定だ。

特集

つながり connection 2 — 地域 — 『食と健康の達人』拠点

『食と健康の達人』拠点は、2年間のトライアル期間で蓄積したノウハウを活かし、2015年度から本格始動した。健康社会を目指して多彩な取り組みを展開している。

札幌キャンパス北西部のフード&メディカルイノベーション国際拠点には、食品や化学関連のほか、総合家電メーカーの研究所など様々な企業が入居している。これらの企業の核をなしているのが『食と健康の達人』拠点である。『食と健康の達人』拠点は、文部科学省・科学技術振興機構の革新的イノベーション創出プログラム(COI: Center of Innovation)に採択された研究開発プログラムで、約30社の企業・機関のほか道内自治体と大規模な産学地域連携を展開している。

企業が持つ技術やノウハウを合わせれば様々なアイデアが生まれ、それを実装するシステムが創りだされる。例えば食と健康の関係についての研究では、腸内環境を健康の「ものさし」として利用することにより、家庭で健康度を測り、個人に適切な食を提供し、病気を予防できる社会を目指している。また、減塩しながらも美味しさを保つ減塩食材・食品や入院中の人でも楽しめるデザート開発も行っている。『食と健康の達人』拠点は、「病気をしないで健康に暮らしたい」「安心して子育て

埋蔵文化財調査センター

時を超え

未来を示す遺跡群。

札幌キャンパスに眠る古代の遺跡は、そこに有史以前から人びとの暮らしがあったことを物語る。大いなる時の流れのなかで、都市は生まれ、また再生していく。

水河期の終わった一万二千年前以前にさかのぼる旧石器時代、縄文文化とそれに続く古代人の遺跡は日本各地で発見されている。遺跡は、当時の生活様式をはじめ社会制度を推しはかる重要な文化財であり、有史以前の歴史を知る重要な手がかりだ。遺跡は古代へのロマンをかき

たてる一方、現実の暮らしにおいて大きな問題の種となる。土地の再開発や建物の新築・改築の際に遺跡や様々な遺物が出土するが、文化財保護法では、工事に先立って記録保存のために発掘調査をするよう定めている。工事開始後に遺跡が見つかった場合、工事は一旦中断され、急

遽発掘調査が実施されるために、納期延期の事態を招きかねない。本学札幌キャンパスと植物園は「埋蔵文化財包蔵地」として登録されており、数多くの遺跡が存在している。キャンパス内の建物や道路の工事に先立って発掘調査を行わなければならないが、それを実施しているのが2015年4月に設置された埋蔵文化財調査センターだ。

うになった。その成果は遺跡を保護するとともに、キャンパスの再開発プランのためにも有効な情報として活用されるだろう。

調査から教育研究へ。

工事に先立つ発掘調査は、埋蔵文化財調査センターの前身である埋蔵文化財調査室の主たる任務であった。センターになってからは、このような緊急の発掘調査に加え、遺跡の全体像を把握することを目的とした学術発掘調査を計画的に実施できるよ

札幌キャンパスの地下に眠る遺跡は、今から約二千年前の縄文文化と約千年前の擦文文化のものである。さらにその上には、明治時代から続く本学の歴史が埋まっている。古い校舎は取り壊され、その上に新しい建物が建てられる。地層からはビール瓶や北大用に作られた病院食器などの生活用品も見つかっている。一般に遺跡は古い物と考えがちだが、出土した明治時代

の生活用品は、文書記録に残されることのない人々の営みを示す遺物として価値がある。古代の遺跡・遺物から近代の生活用品まで、全てが地下に眠る貴重な学術資源、文化資源である。それを適切に史料化・資源化することによって、学術資料として付加価値をつけ、教育や研究に活かしていくことをセンターでは日々行っている。この成果を広報誌（ニューズレター）で紹介すると共に、平日はセンター

の展示室を公開しており、普段目にする事の無い貴重な資料を見ることが出来る。また、年に一度調査成果報告会を開くなど、遺跡に関する啓発活動にも力を入れている。

埋蔵文化財調査の北大モデルを構築。

残された遺跡から歴史を見つめると、都市では遺跡が重層的に分布していることがわかる。住環境の良いところに何世代にもわたって住み続けた証だ。現在でも都市の開発・再開発は基本的にスクラップアンドビルドで新規の建築物や道路が作られているが、今や消費を前提とした社会は曲がり角にきており、持続可能な社会を意識した取り組みが至るところで始まっている。

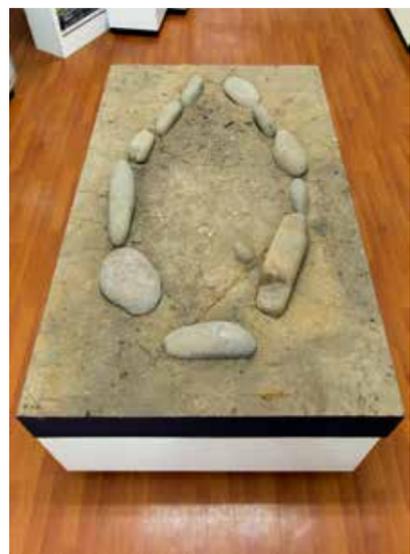


札幌キャンパス内の遺跡は、サクシュコトニ川とセロンベツ川に沿って多く発見されている。文様も美しい土器からは、現代にも通じる生活が確かに営まれていたことを感じさせる。



上/バックヤードでは、発掘した資料の洗浄、分類、ラベル付けなどが行われている。地中でどのように埋まっていたか、それを記録するのも大切な作業だ。

下/縄文文化期の屋外炉址の剥ぎ取り標本。キャンパス内からは、土器、石器はもとより、堅穴住居址、北海道式古墳など、歴史背景を知る貴重な遺跡が発見されている。



「全てをまっさらにして新しいものを作るのではなく、如何にその歴史を引き継ぎながら新しいものを作り出すのかということが、本当の持続という意味ではないかと思えます」と、小杉康埋蔵文化財調査センター長は語る。「キャンパスをフィールドとした埋蔵文化財調査のノウハウをもとに、都市再開発のモデルを提起するのがセンターの役目です」と小杉センター長。埋蔵文化財調査センターの活動は、都市開発において古代から現在、そして未来へ続く道しるべを示している。



ゲスト

越直美氏

大津市長

大津市は、日本最大の湖、琵琶湖の南西に広がる滋賀県の県庁所在地。市町村単位での国指定文化財保有件数は全国で3番目に多く、社寺をはじめ、多くの文化財、史跡、名勝が現存する。本学OGである越直美市長に子育て支援、いじめ防止、将来を見据えた市政などについて伺った。



思いは持続する

チャレンジする気持ち

道を拓く。



私の人生を変えたのは、
インターンシップと
海外留学です。
—越

中学からの思いを胸に
法を学ぶ。

三上 本日は越市長の地元、大津市での取材ですが、お生まれも大津ですか。

越 幼稚園から高校まで、ずっと大津で過ごしました。

三上 北大へ進学されたのはどう
いうきっかけだったのでしょうか。

越 広々として自然が豊かで、元々北海道に対する憧れがありました。高校時代は水泳部に所属していましたが、女性の先輩が2学年続けて北大に入学したのです。

それで興味を持って北大を見に行ったらキャンパスがとても美しく、ぜひ行きたいと思いました。

三上 水泳部から北大に3年連続で入学されたとは、縁がありますね。法学部のご出身ですが、勉学の方はいかがでしたか。

越 大学時代は、かなり真面目に勉強しました。地方で政治に携わりたいという思いは中学の頃からもっていました。山口二郎先生のゼミに入り、1年生の時から政治や地方自治に興味がある方と沢山議論をしました。

三上 中学生時代から政治に関心

をもたれていたのですか？

越 中学2年の時に祖母が腰の骨を折って車いす生活になりました。母が中心となって介護をしていましたが、今のように整った介護保険制度もなく、とても大変でした。そこで、介護などの身近な問題に対して行政ができることがあるのではないかと思ったのがきっかけです。

三上 そうでしたか。どのような学生生活でしたか。

越 ジンパ（ジンギスカンパーティー）はよくやりました（笑）。今は構内でジンパはできないのかもしれない

フロンティア
スピリットを
訊く。

人生を拓いた
インターンシップと
海外留学。

三上 市長になる前に、日本とアメリカで弁護士として働かれています。

越 行政に関わりたくないという思いはありましたが、具体的にどう行動したらいいかわかりませんでした。そこで、政治への志から一度

離れて、司法試験のために勉強を始め、大学院では瀬川信久先生のゼミで民法を学びました。弁護士になったのは、大学の掲示板で東京の法律事務所が研修ができると知り、3週間インターンとして働いたことがきっかけです。

三上 今はキャリアセンターでインターンシップを強く学生に勧めていますが、当時は全学的な就職支援はない時代ですね。

越 インターン募集は、法学部の掲示板で見ました。インターンをした西村あさひ法律事務所に就職したのですが、その事務所は海外

も含めてM&A（合併や買収）を
してしまっていて、弁護士も日本企業
の代表として仕事ができることに
やりがいを感じました。契約はア
メリカ法が基になっているものが
多く、アメリカの法律を学びたい
という思いを持ちました。事務所
では、入所5年ほどたったら全員
留学できるという制度がありまし
たので、ハーバード大学のロース
クールに行き、ニューヨーク州の
司法試験を受けました。

三上 全員留学とは、恵まれた制度ですね。本学では、平成24年度から「新渡戸カレッジ」を開講し

ています。グローバル社会で活躍
できる人材を養成する特別教育プ
ログラムで、定員は学部学生を対
象に1学年200名。実践的な
英語力を修得するための科目や、
リーダーシップの涵養を狙いとし
た演習などを開講し、3ヶ月以上
の海外留学が修了要件の一つに
なっています。

越 それはとても興味深いプログ
ラムですね。私の人生を変えたの
は、インターンシップと海外留学
です。留学して違う文化に触れた
ことは、自分の考え方を変えたと思
っています。

三上 海外留学では言葉の壁があ
りますが、意識して語学の勉強を
されたのですか。

越 日本で中学から英語を勉強してきて、弁護士時代にも英語を使いました。留学してからは英語がでなくなるとも苦労しました。言葉が通じず、辛くて食欲も
ない状態が続きましたが、友達ができたり、いろいろなところに出かけたり、勉強を教えてもらったりしました。

三上 目的意識がはっきりしているから乗り越えられたのでしょうか。

目的意識が
はっきりしていたから
乗り越えられたのでしょうか。
—三上

歴史的財産を活用し、
世界から人が集まる街に。

越 2期目の選挙の時に、「持続可能な町をつくる」「大津に来る人を増やす」「大津に住む人を増やす」という3つの大きな目標を掲げました。「持続可能な町」と

訊く。

女性が自由に選択できる、
生きやすく、子育てをしやすい
社会を目指しています。

— 越

大津市長

越 直美

Naomi Koshi

1975年、滋賀県大津市出身。北海道大学法学部卒業、同大学院法学研究科修士課程修了。2000年に司法試験に合格し、司法修習を修了。2002年西村あさひ法律事務所に入所。2009年ハーバード大学ロースクールで修士号を取得。ニューヨーク法律事務所Debevoise & Plimpton LLPに勤務。2010年コロンビア大学ビジネススクール日本経済経営研究所客員研究員、2011年国際連合ニューヨーク本部法務部で研修を受ける。2012年1月大津市長選挙に立候補し、現職。2016年1月再選し、現在2期目。

す。大津市では、この4年間で約2000人分の保育園を新しく作りました。待機児童は4年前に150人程度だったのですが、実際はその10倍以上の需要があり、市から補助金を出して民間保育園を増やしました。その結果、大津市の合計特殊出生率が上昇しましたし、子供を持ちながら働く女性がとても増えました。

三上 今、大津市職員の女性の割合はどれくらいですか。

越 幼稚園、保育園の先生を含め、市の職員全体で考えると半分近く

います。アメリカで働いていたときに感じたのは、女性が働きやすい環境だということです。日本では、子供をもつ女性がとても苦労しているのを見ていましたが、アメリカでは女性の弁護士が多いですし、男性も子育てをしていて、男性でも1年ぐらい育休を取る人もいます。大津市では、自由に仕事もしたいし子育てもしたいと思う人が、もっと自由に選択できることを目指しています。

三上 本学では、平成18年に女性研究者支援室を設置しています。ポジティブアクション北大方式により、女性研究者の比率を高める活動をしています。職員が安心し

て育児ができるよう、北大内に保育園を設置して運営していますし、研究活動を行う際の資料収集やデータ処理を行う補助者を雇用する支援をして、女性研究者が、出産・育児と自分の仕事のバランスを保ちながら活躍できる支援体制をつくっています。

越 日本では女性が主に子育てをしていて、仕事か子育てか二者択一を迫られます。バランスをとることはとても重要ですね。

三上 ところで、市政においてガバナンスとはどういうことかあります。

越 ガバナンスという点で大きな問題だと感じたのは、いじめが問題になった時です。私が市長になる前ですが、大津市内の中学生が自ら命を絶つという事件がありました。市の中で教育委員会は独立した機関ですので、市長が指揮・命令できませんが、当時、市長に対して当事者である校長や担任を辞めさせろというご意見が多く寄せられ、ガバナンスという点では責任と権限の所在が一致していない制度だと痛感しました。その後、教育委員会を廃止する要望を国に出しましたが、結果として教育委員会制度は残っています。ただ、



出産・育児と自分の仕事の
バランスを保つ支援体制を
つくっています。

— 三上

北海道大学理事・副学長

三上 隆

Takashi Mikami

1949年、北海道出身。工学博士。専門は土木工学。北海道大学工学部土木工学科卒業、同大学院工学研究科土木工学専攻修士課程修了。1974年に北海道大学工学部助手に採用され、助教授を経て、1994年に工学部教授。2006年に大学院工学研究科長・工学部長に就任し、2011年より現職。理事として、総括、評価、広報、情報公開、内部統制、リスク管理、同窓会、施設・環境、防災を担当。

今は総合教育会議という市長の意見がより反映されるような制度ができ、市長と教育委員会が意思疎通をはかって市の教育政策を作る体制をとっています。

三上 市長のもとで改革が進んでいるのですね。最後に、本学の学生に期待することは何でしょうか。

越 アメリカにいる時、友達に「自分にしかできないことをやるべきだ」と言われました。市長になった時、私は36歳で、女性では一番若い市長だったので「経験がない」と言われたこともありましたが、その歳の女性だからこそできることがあると思っています。今の時代は忙しすぎて周りの人の価値観に流されてしまいがちですが、北大には自然の中でじっくり腰を落ち着けて物事を考えられる素晴らしい環境があります。私がそうであったように、ぜひ北大で「Be ambitious」、何について、何をやりたいかをしっかり考え、それに向かって努力をしてほしいと思います。

三上 本日は、強い思いを持ち続けて自らの道を拓いてきた越市長の生き方について伺うことができました。ありがとうございます。

研ぐ。



アフリカ社会の構造に迫る
現地調査に基づいた
国際政治学。

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション
研究院
公共伝達論分野
鍋島 孝子 准教授
Takako Nabeshima

政治学博士。専門は国際政治学、アフリカ地域研究。東京大学大学院法学政治学研究所修士課程修了。パリ第一大学第三課程政治学博士課程修了。UNHCR「キャンプ・サダコ」のカクマ難民キャンプ（ケニア）での研修、在マダガスカル日本国大使館専門調査員などを経て、2006年北海道大学言語文化学部助教授、2007年から現職。

矛盾に満ちた社会構造への挑戦。

アフリカと聞いてイメージするものには何があるだろうか。雄大な自然や野生動物、あるいは民族紛争や貧困、飢餓であろうか。日本は地理的にも歴史的にもアフリカから遠く、必ずしも現実理解が進んでいるわけではない。無理解から生まれる偏見を取り除けるよう貢献したいと研究しているのが、メディア・コミュニケーション研究院の鍋島孝子准教授である。通常、政治学は権力を扱う学問であるが、鍋島准教授は最も権力から遠い農民から考える。国際政治学の理論と、20年以上に及ぶ現地

のフィールドワークから、近代化によるアフリカ農村の変容を研究している。

かつてアフリカは、先祖から受け継いで守ってきた文化や慣習、価値観、社会構造などをヨーロッパ列強から「野蛮」と否定され、植民地体制下に置かれた。植民地統治下で変容した農村共同体は、1960年以降の独立後、「アフリカ性」を復権し、国民国家の建設に農民を動員するための「アフリカの社会主義」



青年協力隊OGのお土産、南アフリカ共和国のモビール。様々な衣装をまとった人々の賑やかな雰囲気が伝わってくる。

のシンボルに利用された。しかし実際には、そのようなアフリカを体現するような伝統的農村共同体はすでに植民地で壊されおり、さらに文化・価値観は各共同体や民族によって異なるはずである。つまり、「ナショナルリズムを喚起するためのねつ造された伝統が農民に押しつけられた」と、鍋島准教授は語る。さらに今日のグローバルゼーションの中、物や知識・技能、金融が国境を越えて入ってきて、伝統的農民はそれに追いつけない。このような歴史的過程で、アフリカ農民は国家にも伝統的首長にも正統性を見出せず、アイデンティティーの危機を起



マリで買った泥染めの布とマダガスカル刺繍。

し、生き残りをかけて排他的な民族中心主義の軍閥に近づいてしまう。これが恐らく、今日でも苛烈な民族紛争と暴力の一つの要因であろう。

政治学は紛争の原因探求の学問であり、新しい見解と概念構築から国際社会や国民国家、社会のあり方を描き出す。一方、政治学者が実際に政策提言するのは、慎重にすべきだと鍋島准教授は考える。それでも、国際機関を指し、実際に日本の外交の場で働いた経験のある鍋島准教授は、アフリカの国家と社会に働きかけるアプローチをとる。国家政策の矛盾が噴出するアフリカの農村と農民の生活の現実を学生に伝え、問題の所在を考えさせ、教育や技術開発、医療など、それぞれの専門から問題解決の提言ができる人材育成を試みている。

アフリカの課題を解決する。

鍋島准教授の研究は、新たな展開を遂げている。工学研究院の船水尚行教授が代表者の、JICA・JST地球規模課題対応国際科学技術協力事業SATEPS「アフリカサヘル地域の持続可能な水・衛生システム開発」に共同研究者として参画した。このプロジェクトは、アフリカの乾燥地に自然条件と社会構造に適したコンポストトイレを導入するという取り組みであった。これを成功させるには、工学的技術だけではなく、導入するアフリカの農村の社会構造を熟知している研究者との協働が不可欠であった。農村共同体の機能や伝統的首長の役割、農業生産者団体の組織体などを研究している鍋島准教授は、他の社会科学研究者達と共に、少女が水汲みをするジェンダーの実態、人糞に対する文化的な拒否反応などを調べた。

鍋島准教授は、2017年4月本学に新設される大学院「国際食資源学院」で教鞭をとる。生産と環境、ガバナンスという

憩う。

やっぱりアフリカ!

アフリカのジオグラフィックな写真集を見ている時間がとても落ち着く、と鍋島准教授。紛争や非人道的とは異なる、アフリカの多様性が垣間見られる写真集だ。



時を経て醸成する夢。



有限会社ムラタ
伊那ワイン工房取締役社長

村田 純

Jun Murata

| 薬学部卒業 |

日本に合うワインの姿を求めて、永年ワイン醸造に関わる仕事をされてきた村田純さん。ワイン作りにおける思いを語っていただいた。

「ワイン作りに携わることになったきっかけをお聞かせください。」
薬学部4年生の春、実習で十勝に行った時に、初めて十勝ワインのブドウ畑を見て、その広大さに圧倒されました。もともとフィールド的なことをしたかったので、面白そうだな、と思いました。

実際にワインに関わったのは就職後です。ある会社で面接中、社長が実はワインを始めたいので、ワイン製造ができる人材を探していると言います。「ぜひやらせてください」と売り込み、ワイン担当として入社しました。

入社後はまず、山梨大学で1年勉強し、ブドウの苗植えからスタートしました。栽培はうまくいくようになりましたが、当時は醸造免許を取るのが難しい時代でしたので、収穫したブドウは山形のワイナリーで醸造していました。

「出身地の長野で工房を開くまでは、どのような経緯でしたか？」
あるとき、長野のワイナリーで新



夏りんごや山葡萄などのワインが綺麗に並べられた棚。カラフルなラベルがワインを選ぶ楽しみを倍増させてくれる。「伊那ワイン工房のロゴマーク(22ページ写真壁面)は、近所のイラストを描く人が作成してくれました。ワインのビンが中心に、周りには工房の「工」の字を表しています」

でなく、生物、物理、地学とすべてのことが入ってきます。それらの基礎を勉強するには薬学部が一番いいですね。

「最後に本学に期待することをお聞かせください。」
北大は、これからもしっかりとした学問の場であってほしいと思っています。基礎研究など実社会ですぐに役立つものでなくても、人々の感性を豊かにしたり、人間のメカニズムを解き明かしたりする研究を突き詰めてほしいです。

北大交響楽団の演奏会パンフレット。練習や運営で、「授業なんて行く暇がなかった」。表紙のイラストの中には、村田さんの奥様が描かれたものもある。



「ブドウやリンゴを栽培している人が表現者です。目的を持ったワインをつくって、表現者の手伝いをしていきたい。」



工場を任せられる若い技術者を探しているとき、移ることにしました。出身地、松本の隣、三郷村の安曇野ワイナリーだったのですが、工場を建ててオープンするところから関わり、10年ほど工場長を務めました。ワイナリー製造に関わるようになってから、いつかは自分のワイナリーを持ちたいと思っていました。安曇野ワイナリーを辞めた後、ワイナリーのコンサルティングや小さなワイナリーの経営に携わっていました。その思いは変わりませんでした。ワインを作る建物があればどこでもやろうと北海道も含め探していたときに、偶然この建物を見つけたのです。もとは病院でしたが、地下には醸造に適した、温度と湿度を一定に保てる車庫があります。初めて見たときからこの建物がワイナリーに見えました。その後、醸造免許を取るために一気に話を進めました。2014年9月に免許を無事取得し、醸造を始めました。

それぞれの思いに合うワイナリーをつくる。

「どのようなワインを作っているのですか？」

「ここは、ブドウ100キロから

いから「あなたのワインを作りましょう」というオーダーメイドのワイン醸造場です。ヨーロッパのワインと比較して遜色がないワインを目指すのではなく、日本の土地に合う品種で作る、日本人が飲んで美味しいと思うワインです。日本でワインを作る意味を探っているうちに、原料を探った人や、地域の人たちが楽しんでくれるお酒が本来のワインの姿ではないかと思ふようになりました。同じ原料でも醸造の仕方によって甘い辛いはもちろん、香りや渋み、飲み頃の時期まである程度コントロールできますから、まず、どんなワインを作りたくて、どんな目的で使用するかをしっかりと聞きます。評価の定まった高級ワインはお金を出せば手に入りますが、その目的に合ったワインを原料の段階から作りあげていければ、委託者にとっては他のどのワインよりも素晴らしいワインとなるはずですよ。

伊那にワイナリーはなかったのだから、ここは地域の人たちに重宝されています。伊那市や信州大学から委託されて、ナイアガラブドウやヤマブドウ、リンゴのワインを開発してきました。地域に密着していくのと

PROFILE

1961年長野県出身。1986年北海道大学薬学部卒業。就職先の臨床検査会社でワイン製造担当となり、山梨大学で企業派遣研究員として醸造を学ぶ。安曇野ワイナリー工場を経て、信州まじ野ワイナリー専務へ。2014年9月伊那ワイン工房を開業。伊那市産山葡萄を使ったワイン「山紫」は高い評判を得て、伊那市の特産品として注目を集め始めている。



1

1. 式の結びは札幌農学校校歌「永遠の幸」斉唱でした。参加者全員で肩を組んで歌い、大いに盛りあげました。
2. アンバサダー・パートナーの証として、アンバサダーには金色、パートナーには銀色の本学ロゴ入りのバッジを作成しました。
3. アンバサダーには、名刺入れのご用意もあります。
4. ソウルにある本学オフィスが入る建物の外観。韓国の北海道大学コミュニティ活性化にも積極的に取り組んでいます。



4



2



3

「アンバサダー・パートナー制度」が始まりました。



4月にソウルで行われた「韓国北海道大学アンバサダー・パートナー委嘱式及びヨルリョンチョ会発足式」での集合写真。

北海道大学は、「世界の課題解決に貢献する大学」として大学改革を行うための改革10年戦略「Hokkaido Universal Campus Initiative (HUCI)」を2014年に開始しましたが、この改革プランの柱のひとつに「国際広報力の強化」を掲げ、北海道大学コミュニティの拡充と活性化に取り組んでいます。本学の国際的知名度向上や世界的な人的ネットワーク構築を進めていくためには、それぞれの国・地域の実情に沿ったきめ細やかな対応が求められます。そのためには、北海道の地から海外へと単一方向に働きかけるだけでなく、現地の状況に応じて機動的に対応できる仕組みの整備が不可欠です。そこで、今年度から新たに「アンバサダー・パートナー制度」を発足させました。

この制度は、海外在住の同窓生や本学関係者の中から協力者を募り、海外における北海道大学コミュニティの拡充と活性化のために本

学への支援と協力をお願いするものです。それぞれの国や地域において、中心となって本学を支援して下さる方に「アンバサダー」を、また、より機動的に活動しつつ、アンバサダーの支援もして下さる方に「パートナー」をそれぞれ委嘱し、世界中に「北大応援団」の輪を広げようという狙いがあります。例えば、アンバサダーには、現地における人的ネットワークの構築や現地のインターンシップサイトの開拓などの活動を、パートナーには、現地アンバサダーの活動支援のほか、SNS を活用した現地言語での本学情報の発信や、現地における大学説明会等のイベント支援のような活動を行っていただくことを想定しています。また、本学に留学を希望する現地学生や現地へ留学を希望する本学学生への支援、本学から現地へ関係者が訪問する際の支援なども役割として期待されます。

このアンバサダーとパートナーの

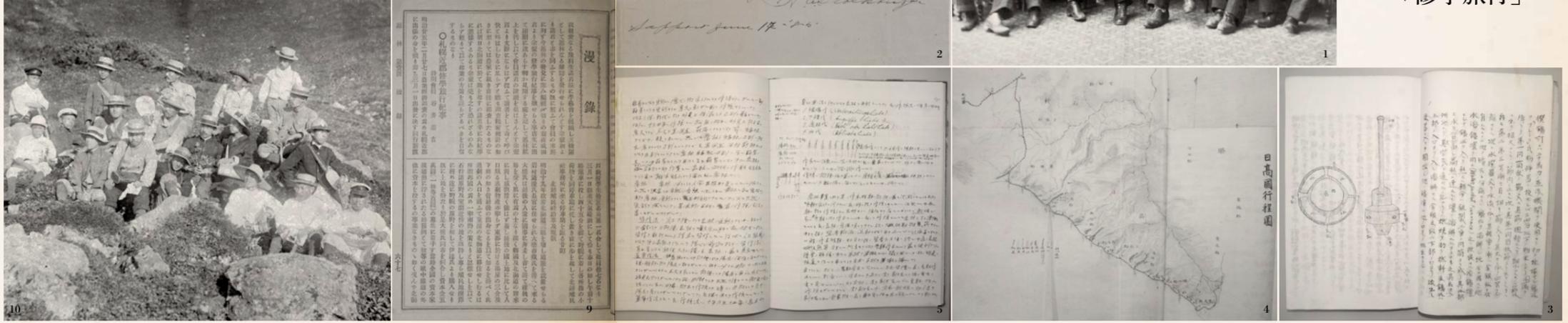
選考にあたっては、各部署や海外オフィス、同窓会等の本学関係機関・組織の協力を得ながら候補者情報を収集するほか、学内からの推薦も受け付け、最終的にはその候補者の中から総長が委嘱します。今後の計画としては、本学の同窓生が居住するほぼ全ての国や地域にパートナーを配置するため、2023年までに300人にパートナーを、その1割に当たる30人にアンバサダーを委嘱することを目標としています。

さて、現在の状況ですが、今春の制度発足と同時に、韓国においてアンバサダーを3人に、パートナーを30人に委嘱し、4月9日にソウルで委嘱式が行われました。また、その他の複数の国・地域において候補者の選考作業が進んでおり、今年度中に新たなアンバサダーとパートナーが委嘱される見込みです。次号からは、各国のアンバサダーやパートナーの寄稿文を掲載していきます。

温故知新 北海道大学
挑戦の140年
 SCENE-6
1885-1907
 「修学旅行」



1. 札幌農学校第十期生、前列右端が角田啓司 (1891年 大学文書館蔵)
2. ストックブリッジの地質学実習旅行許可願 (1885年 附属図書館蔵)
3. 鉾山見学修学旅行の報告書 (1894年 大学文書館蔵)
4. 日高地方修学旅行の行程図 (1899年 大学文書館蔵)
5. 札幌農学校講師角田啓司講義「造林学」受講ノート (1897年 大学文書館蔵)
6. 動物学修学旅行一行 (1901年頃 植物園蔵)
7. 角田啓司「旅行復命書」 (1890年 大学文書館蔵)
8. 札幌農学校の修学旅行報告書 (1901年 大学文書館蔵)
9. 『蕙林』第1号掲載の「修学旅行紀事」 (1892年 大学文書館蔵)
10. 植物・昆虫採集旅行記念 (1897年頃 大学文書館蔵)



Hokkaido University HISTORY 1885-1907	
1885年 6月	ストックブリッジが引率し 幌内地方に地質学実習旅行を実施
1886年 6月	カッターが引率し小樽・銭函に鮭漁調査旅行を実施
10月	ストックブリッジが引率し 地質学研究旅行を実施
1889年 6月	ブリガムが引率し植物実習旅行を実施
9月	ブルックスが引率し千歳に植物調査旅行を実施
1890年 6月	第9-11期生が石狩・空知地方に農視視察旅行を実施 第10期生角田啓司が「旅行復命書」を校長に提出
1892年 3月	第11期生が札幌近郊農業調査旅行を実施
5月	第11期生谷井恭吉が校友会誌『蕙林』第1号に「札幌近郊修学旅行紀事」を掲載以降、「修学旅行」の名称と学生による報告書作成が定着
1906年 7-9月	報告書記録がある札幌農学校最後の修学旅行
1907年 9月	札幌農学校が帝国大学に昇格

大学文書館 だいがくぶんしょかん Hokkaido University Archives
 北海道大学に関する歴史的な資料を収集・整理・保存して利用に供するとともに、北海道大学史に関する調査・研究を行っている。

角田は「旅行復命書」のまとめとして「農家教育ノ普及」と「農業試験場設置ノ必要」を論じている。また、「農業ハ実用ノ学ニシテ理ヲ研究スト雖トモ實際ニ当リテ応用ノ術ヲ学フニ非ズンハ其功効ヲ致スコト甚タ難矣」（農業は実用の学問であっ

札幌農学校の「修学」旅行

川左岸の内陸を空知太（砂川）・市来知（三笠）・岩見沢・夕張と回って札幌に帰着した。各地の戸長役場や農家などで地勢・作況・経営・生活状況等の聴き取りをし、篠津の屯田兵村、新十津川の集団移住地、三条実美らが所有する巨大な雨竜農場などを見学し、原野では地形・土質・地味などを調査した。雨竜農場では現地の監督責任者である柳本通義（第一期生）と町村金彌（第二期生）、北海道庁で殖民地撰定・区画を担当する内田濤（第一期生）と会談し、農学校卒業生の仕事を目的に当

「生等農業視察ノ為メ旅行ヲ命セラ 山河ノ配置水利ノ

て理論を研究しても実際に応用する方法を学ばなければ効果を上げることは難しい」、「生等農業視察ノ為メ旅行ヲ命セラ」ル依テ応用ノ術ヲ学ヒ即チ土地ノ肥瘠山河ノ配置水利ノ便否作物ノ適否農家ノ実況ヲ熟知スルノ好期ヲ得タリ」（私たちが農業視察のために旅行を命ぜられ、応用の方法を学ぶ、即ち土地が肥沃か不毛か、山や川の地形、水利の便不便、作物の適不適、農家の実況を熟知する好機会を得た」と述べている。

札幌農学校の修学旅行は師範学校とはやや異なるルーツを持ち、農学校における勉学に直結していた。旅行中の見聞・調査はそのまま生の教材となって農学校の講義を充実化し、仕事に従事する卒業生の姿は農学校生自身の将来を想像する貴重な機会であった。正に「修学」旅行であったと言える。札幌農学校の修学旅行は「実学重視」の特徴を示す一カリキュラムとなり、帝国大学昇格後も形を変えて続いた。

一方、札幌農学校では、初代教頭W.S.クラークが頻繁に第一期生を引率して野外採集へ出かけた。一八七七年一月には手稲山への雪中登山を敢行し、新種の地衣類（クラークゴケ）を採集した。クラーク離任後の一八七七年夏休みには、農学校生が三手に分かれ、三名の外国人教師がそれぞれの団を引率し、石狩川上流遊覧、室蘭・長万部・岩内方面への植物・鉱物調査、黒松内道路線測量の野外実習旅行を実施した。農学校ではこうした野外実習旅行をその後も度々実

札幌農学校のフィールドワーク

日本では最初の修学旅行は、栃木県立第一中学校が一八八一年に行なった上野の内国勧業博覧会見学とする説がある。また、一八八六年に東京師範学校（現筑波大学）が実施した「長途遠足」が嚆矢とする説もある。東京師範学校の「長途遠足」については、『大日本教育会雑誌』が旅程の詳細を紹介している。二月十五日から二十五日にかけて九十九名の生徒が東京と銚子を往復、軍装・銃器携帯の行軍形式で習志野練兵場に滞在して兵式練練を実施する一方、途中で気象観測、植物採集、学校見学なども実施した。師範学校は教員養成を目的としていたため、兵式による集団行動訓練と学科演習を兼ねた教育プログラムとして実施したと考えられる。翌年には「修学旅行」の名称も登場し、全国の学校に普及していった。

ル依テ応用ノ術ヲ学ヒ即チ土地ノ肥瘠 便否作物ノ適否農家ノ実況ヲ熟知スルノ好期ヲ得タリ」

第十期生角田啓司は総代として一八九〇年六・七月に実施した旅行の記録を「旅行復命書」として校長に提出している。札幌農学校の修学旅行の詳細な旅程が分かる最初の記録である。

このときは、南鷹次郎教授などが引率して石狩・空知地方の農視視察を行なった。六月二十一日早朝に汽車で札幌駅を出発した学生たちは、頭を悩ました学期試験を終えたばかりとあり、鬱憤晴らしとばかりに「山ヲ跋ミ川ヲ涉リ雨ニ淋シ風ニ櫛ルヲ以テ学生ノ一大快事トシ好テ険ヲ冒サントスルノ風アリキ」（山を歩き川を渡り雨に濡れ風に吹かれる労苦を痛快な楽しみとして、敢えて冒険を望む心持ちであった）という。汽車・舟・馬・徒歩で、七月七日までの十七日間、札幌から江別に至り、石狩川に沿って当別・月形・新十津川・音江法華（深川）を通って上川原野（旭川周辺）まで至り、石狩

一八九〇年の 石狩・空知地方農視視察

札幌農学校では開校以来、フィールドワークを重視する校風が形成されていた。こうした校風を背景として、札幌農学校で修学旅行が定例行事化するのは一八八五年頃である。

施した。それとは別に外国人教師が開拓使や北海道庁などから委嘱を受けて地質や土質、植生などの調査をする際に、農学校生が随行することも多かった。さらに、夏休みなどを利用して農学校生個人が頻繁に調査・見学旅行を行なった。札幌農学校では開校以来、フィールドワークを重視する校風が形成されていた。

総合博物館・大学文書館が リニューアル

総合博物館・大学文書館のリニューアルが完了し、より一層知的好奇心を刺激する場として再開しました。

見て、触って、感じて！
総合博物館。



獣医学部の展示室には、迫力ある骨格標本が並ぶ

総合博物館が耐震改修工事による1年余りの休館期間を経て、7月26日にリニューアル・オープンしました。北海道大学には、札幌農学校時代から収集・保存・研究されてきた400万点にのぼる学術標本が蓄積されています。現在、このうち約300万点が総合博物館で保管されており、その分野は海藻や植物、海産無脊椎動物、昆虫、魚類、鳥類、哺乳類、地質（化石・鉱石・鉱物・岩石）、考古、歴史、科学技術史など多岐にわたります。歴史ある建物の趣を残しながらリニューアルした総合博物館では、

これらの学術標本とその研究成果を紹介する展示を充実させました。さらに、12学部における教育や研究、最近設置された研究機構を紹介する展示、研究センター等の展示、五感で標本を感じる展示、博物館活動のバックヤードを公開するミュージアムラボが新設されています。カフェやショップ、多目的スペースからなる「知の交差点」エリアも整備されました。6月から10月の金曜日は夜9時まで開館しており、研究者と交流するサイエンスカフェやポブラチェンバロ演奏会



鉱物や岩石、動物の骨など多様な標本に触れて感じる展示室

○開館時間 10:00～17:00 ※6～10月の金曜のみ10:00～21:00
○休館日 月曜、年末年始 ※月曜が祝日の場合は開館し、翌平日休館臨時休館あり
○所在地 札幌市北区北10条西8丁目
○電話 011-706-2658



市民と研究者の交流の場である「知の交差点」エリアには、食材にこだわるカフェを新設

などが開催されています。年間10万人を超える来館者を迎え、北海道大学の学生や博物館ボランティアなどさまざまな人が集い、活動展開している総合博物館。これまで以上に市民の皆様の知的好奇心を刺激し、親しまれる場となっていくでしょう。



北大生が企画開発したグッズをはじめ、博物館オリジナルの商品やセレクトグッズが並ぶショップ



下/閲覧室

開校以来の歴史をひもとく 大学文書館。

大学文書館は建物移転を行ない、4月1日にリニューアル・オープンしました。新たな2階建て建物には閲覧室、展示ホール、沿革展示室、資料収蔵庫8室、作業室、会議室などを備え、歴史資料を閲覧することができます。

本学には、前身校である札幌農学校開校の1876年から140年にわたり、貴重な歴史的資料が数多く保管されています。開校から区切りとなる年には記念式典を開催し、大学史を編纂・刊行してきました。特に50周年にあたっては、札幌農学校時代の公文書資料を整理して附属図書館で展示会を開催しています。

大学文書館は2005年に設置され、大学の公文書、講座・研究室の旧蔵資料、大学関係者の個人資料、関係組織の沿革資料など本学の歴史に関係する各種資料を収集・整理・保存・公開し、大学史に関する展示や調査・研究を行なっています。

大学文書館リニューアル・オープンは、10年後の創基150周年に向け、今後も本学が歴史と沿革関係資料を貴重な財産として大切にしていこうとする姿勢を示すものです。資料の閲覧や展示の観覧などを通じ、本学の歴史にふれることができます。

左/戦前期に納豆菌を研究し、衛生的な納豆製法の普及を図った半澤洵教授の関係資料



右/札幌農学校の公文書資料
最も古いものは前身校である開拓使仮学校時代の1872年までさかのぼる



○開館時間 9:30～16:30
○休館日 土・日・祝日、年末年始
○所在地 札幌市北区北8条西8丁目（クラーク会館の西隣り）
○電話 011-706-2395
※大学文書館では、本学の歴史に関する資料の情報提供やご寄贈をお願いしております。

01

重厚な外観はそのままに内部をリニューアル

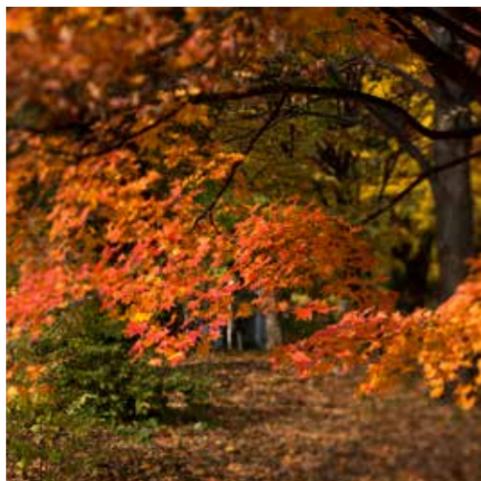




d



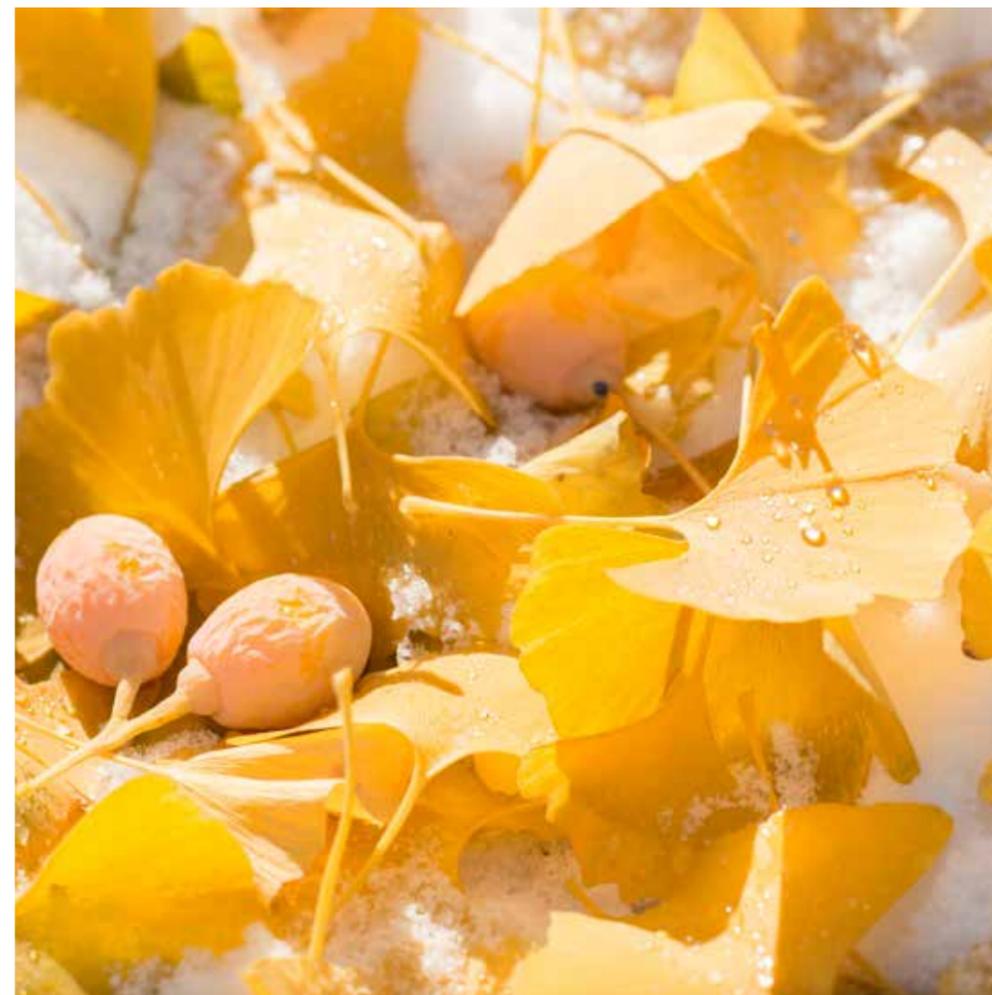
b



e



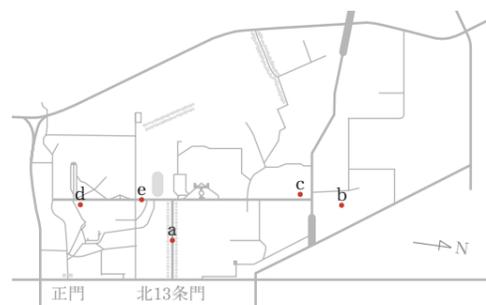
c



a

区切りをつけ、移りゆく季節。

撮影/山本顕史



- a・イチヨウ並木
- b・札幌農学校第2農場
- c・高等教育推進機構
アドミッションセンター
- d・古河講堂
- e・メインストリート

10月20日、札幌に初雪が降りました。10月に北海道全域で初雪が観測されるのは16年ぶり、記録的に早い冬の訪れだとか。

平成ポプラ並木は、本学創基125周年記念事業として2000年に教職員、学生のほか、市民も参加して植樹されました。10月中旬、苗木を植えている作業の間、確かにその年初めての雪が降っていたことを憶えています。

初夏から晩秋まで、学内では北大祭、北大マルシェ、ホームカミングデー、イチヨウ並木の一般開放など、市民や同窓生をお迎えして多数の行事が開催され、賑わいをみせました。

静かに降る雪がキャンパスの賑わいに区切りをつけます。大きく成長したポプラにも、また沢山の雪が積もるでしょう。